

平成 28 年度全国科学博物館協議会海外科学系博物館視察研修報告

西 野 藍 子 *

概 要

全国科学博物館協議会では、海外の科学系博物館における管理運営や展示技術・手法、教育普及活動等の博物館活動に関する知識を深めるための研修を行っており、平成 28 年度はアメリカ西海岸の科学系博物館の視察研修を実施した。

今回、この研修に参加する機会を得て、アメリカ西海岸の三都市(サンディエゴ、サンノゼ、サンフランシスコ)の科学系博物館 4 施設を公式訪問し、自主研修としてその他近隣の館もいくつか視察した。本稿では、その視察研修について報告する。

1. はじめに

平成 29 年 1 月 9 日(月)～19(木)の 11 日間、全科協科学系博物館視察研修に参加した。この研修では、科学と技術に関する資料や展示が豊富なアメリカ西海岸の三都市(サンディエゴ、サンノゼ、サンフランシスコ)の科学系博物館を視察訪問した。

公式訪問では、サンディエゴ自然史博物館、テックイノベーション、カリフォルニア科学アカデミー、エクスプロアトリウム¹の 4 施設を視察し、その他自主研修として近隣施設にも訪問した。

今回の研修参加者は水族館や科学館の職員、展示制作に携わる企業関係者など、計 12 名であった。



写真 1_1. 視察研修の参加者 12 名

以下に訪問先一覧を示す。

表 1_1. 視察訪問先一覧

日 付	都 市	訪問施設
1/9 (月)	サンディエゴ	ミッドウェイ博物館
1/10(火)		サンディエゴ自然史博物館
1/11(水)		ルーベン・H・フリート科学館
1/12(木)	サンノゼ	Intel ミュージアム
1/13(金)		テックイノベーション
1/14(土)	モントレー	モントレーベイ水族館
1/15(日)	サンフランシスコ	ローレンス・ホール・オブ・サイエンス
1/16(月)		カリフォルニア科学アカデミー
1/17(火)		エクスプロアトリウム

本稿では、公式訪問した 4 施設、および自主研修で訪問した中でも特に印象深かった博物館について、視察内容を報告する。

2. サンディエゴ自然史博物館

サンディエゴ自然史博物館は、1874 年に設立されたカリフォルニア州南部では最も古い科学系博物館である。サンディエゴのバルボアパーク内にあり、おもに南カリフォルニアやメキシコなどの生物多様性について、

* 大阪市立科学館 学芸員
nishino@sci-museum.jp

調査研究、教育普及、および資料保存を行っている。

サンディエゴ博物館の外観と概要を以下に記す。



写真 2.1. サンディエゴ自然史博物館 外観

表 2.1. サンディエゴ自然史博物館 概要

設立年	1874 年
運営元	非営利団体組織
展示エリア	32,000sq.ft.(約 3,000 m ²)
対応言語	英語、スペイン語
収集資料	約 730 万点以上
研究図書	約 6 万書
写真アーカイブ	約 5 万点以上
年間入館者数	約 38 万人
スタッフ体制	常勤フルタイム:103 名 常勤パートタイム:58 名 非常勤:41 名 ボランティアスタッフ:741 名

今回は公式訪問ということで、館の教育担当であるロバートさんと、その上司であるベスさんにいろいろなお話を伺った。



写真 2.2. 公式訪問のようす
(奥中央:ロバートさん 奥左:ベスさん)

2-1. 博物館の使命

この博物館では、研究、教育、展示を通じて自然界を理解すること、南カリフォルニアとバハカリフォルニア半島(メキシコ)の進化と多様性の理解を促進すること、そして自然と環境を尊重する心を育てることを、使命として掲げている。そして、展示や出版物、教育プログラムを通して、自然史や環境教育における指導者となるような人材の育成にも力を入れている。

2-2. 資料収集・保存

科学資料のタイプ標本を含む 730 万件以上もの研究標本が収集されている。タイプ標本とは、個々の種を記録するために使用される標本を指す。分野は、鳥類・哺乳類・植物・爬虫類・海洋無脊椎動物・鉱物・古生物など多岐にわたる。これらの資料を収集することは、もちろん調査研究のためでもあるが、変化を続けてゆく生態系や環境の連続的な記録を未来の世代へと引き継いでいくため、収集保存を行っている。

今回の公式訪問では、ロバートさんにバックヤードを案内いただき、資料がどのような環境と形式で保存されているのかをご紹介いただいた。



写真 2.3. 研究図書の書庫



写真 2.4. ロバートさんとボランティアスタッフの方々



写真 2_5. 収蔵庫のようす



写真 2_6. 蝶の採集標本

2-3. 展示エリア

展示エリアの面積は約 3,000 m²、年間来館者数は 38 万人と、展示場のみで言えば面積・来館者数ともに当館とほぼ同規模である。



写真 2_7. 展示場のようす

展示場は1階から4階までで、常設展示は5つのエリアに分かれている。さらに、期間ごとに切り替わる企画展エリアが2つある。常設展示には、古生物の化石や

骨格標本などを展示する「Fossil Mysteries (化石の謎)」や、南カリフォルニアの地理的特徴を紹介する「Coast to Cactus in Southern California (南カリフォルニアの海岸から砂漠)」などがある。単に標本を展示するだけでなく、触って感触を確かめられるものや動かして観察できるものなど、体験展示の工夫もあった。



写真 2_8. 恐竜の骨格標本

また、1 階にはオムニマックスが併設されており、来館者は海洋生物や植物など、さまざまな科学映像を観覧できるようになっている。



写真 2_9. オムニマックス

2-4. 教育プログラム

従来抱えていた課題として、小学5年生までは年齢に応じた学習プログラムがあるため足を運んでも、その後は博物館に来なくなるパターンが多かったという。そこで、中学生向けの特別プログラム「サマーキャンプ」を実施し、定期的に博物館へ来てもらえるよう工夫している。このサマーキャンプ経験者は高校生になると、今度はボランティアスタッフとして教える立場で参加することができ、教える力を養う機会となっている。

3. ルーベン・H・フリート科学館

バルボアパークにはサンディエゴ自然史博物館の他に美術館や人類博物館、鉄道博物館、動物園など、10 以上もの博物館が併設されている。筆者は自主研修日にそのうちの1施設、ルーベン・H・フリート科学館を視察訪問した。

たい」と「温かい」という信号を同時に脳へ送ってしまうため、脳が処理しきれずに錯覚を起こす現象である。



写真 3_1. ルーベン・H・フリート科学館 外観

3-1. 展示場

館内は1階と2階が展示場となっており、1階にはIMAXシアターが併設されている。展示場は6つのエリアに分かれており、そのうち2エリアは期間限定の企画展エリアとなっていた。筆者が訪れた際、館内は学校団体や家族連れでにぎわっていた。



写真 3_2. 館内は学校団体や家族連れが多かった

1階の「RETRO-ACTIVE SCIENCE」エリアには、物理学や光学に関するさまざまな科学原理を体験できる30以上の展示があり、来館者は自分の感覚を以て原理を学ぶことができるようなものが多かった。例えば写真 3_3 は、大きさの異なるビーズが入った円盤を同時に回転させるとどうなるか？を体験する展示である。実際には大きいビーズの方が早く止まり、小さいビーズの方はいつまでも回転を続ける。これは、ビーズの大きさによってビーズ間に生じる静電気力と重力の強さが違うため起こる現象である。

また写真 3_4 は、冷たい水と温かいお湯が入った金属管を交互に巻いたもので、これを手のひらで触るとどのように感じるか？を体験する展示である。実際には、一瞬とても熱く感じる。これは、手のひらの神経が「冷



写真 3_3. ビーズの大きさに静電気力と重力の強さの違いを体験する展示

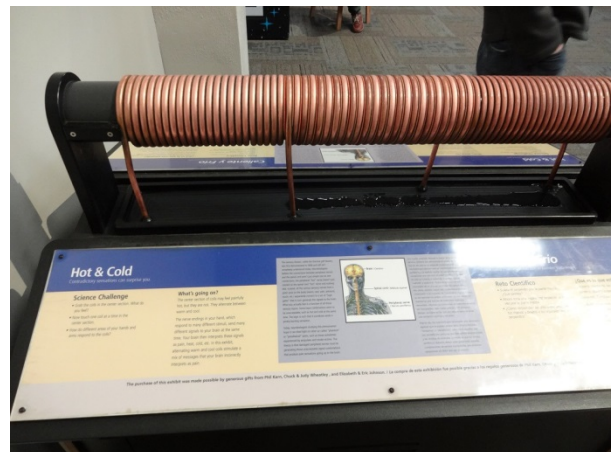


写真 3_4. 手のひらの神経を利用した脳の錯覚を体験する展示

3-2. IMAXシアター

IMAXシアターでは、天文や宇宙、その他科学に関するオムニマックス映像を見ることができる。基本的に映像番組を流すだけで、解説員の星空解説はない。



写真 3_5. ドームシアターのようす

ただし月に 1 回だけ、第 1 水曜日には解説員がプラネタリウム解説を行い、その後実際に外へ出て天体観測をする特別プログラムを開催している。(残念ながら筆者が訪れたのは第 2 水曜日だったため、見ることはできなかった)

番組開始前にはスタッフがホール内の注意事項をジョークを交えながら軽快に説明していた。観覧者の反応も良く、拍手が起こったり大きな相槌を返していたことが印象的であった。そして何より驚いたのは、ドームシアターを紹介する際、シアターを外側からライトアップして見せてくれたことである。アメリカでは珍しくないそうだが、日本ではあまり見かけない演出であり、筆者としても初めての光景であった。

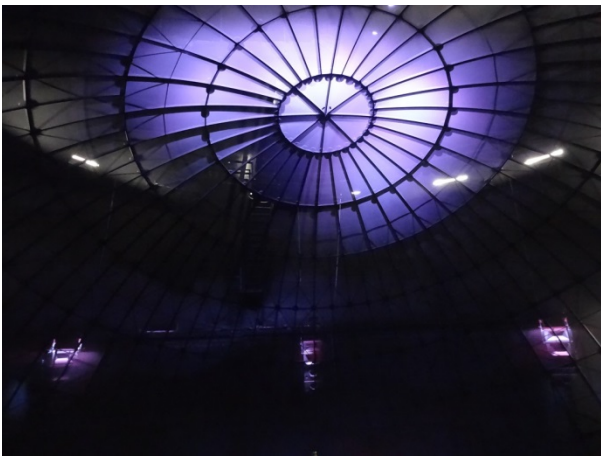


写真 3_6. ドームが外側からライトアップされている

番組終了後、スタッフの方にお話を伺った。とても丁寧に対応していただき、コンソールやバックヤードまで見せていただいた。



写真 3_7. 左:注意事項を説明していたスタッフの方

4. テックイノベーション

テックイノベーションは、ハイテク産業のメッカといわれるシリコンバレーに位置する科学技術博物館である。

1978 年に発足し、その後 1998 年に現在の場所へと

移転し、「The Tech」としての活動を開始した。シリコンバレーという立地を活かし、近隣の IT 企業などとパートナーシップを結び、最新技術を含む幅広い技術の体験展示を行っている。外観写真と概要を以下に記す。



写真 4_1. テックイノベーション 外観

表 4_1. テックイノベーション 概要

設立年	1978 年
運営元	非営利団体組織
展示エリア	132,000sq.ft.(約 12,300 m ²)
対応言語	英語、スペイン語
年間入館者数	約 40 万人
スタッフ体制	約 120 名(常勤・非常勤含む) ボランティアスタッフ:375 名

今回は公式訪問ということで、スタッフのベニスさん、クリスティーンさん、ブレンダさんにお話を伺った。数年前までは静的展示が多かったが、2012 年に現 CEO が就任したことで、シリコンバレーという立地を最大限に活かした体験型展示へと大幅に改革されたという。



写真 4_2. 公式訪問のようす
(左:ベニスさん、中央:クリスティーンさん、
右:ブレンダさん)

4-1. 博物館の使命

この科学館では、「すべての人に問題解決する能力を身につけてもらうこと」を使命として掲げている。そして、最先端の技術に関する体験展示を通して、想像力や判断力を身につけてもらうことも重要視している。

4-2. 展示場

展示場は3フロアに分かれており、IMAX シアターも併設されている。各展示にはバーコードリーダーがついており、来館者はチケットに印刷されたバーコードをかざすことで、見学した展示が記録されてゆく。館内に設置された専用機器で自身の見学記録を視覚的に確認することができる。また、HP 上でも確認することが可能となっている。



写真 4.3. 専用機器で見学記録が確認可能

また館内には、機械工学やロボット工学、電子工学などの科学技術に関するモノづくりを体験できるエリアがあり、来館者は豊富な体験プログラムを通じて、最先端の技術を身近に学ぶことができるようになっている。

例えば「The Tech Studio」では決められたテーマがあり、参加者はそのテーマに沿って用意された部品や器具を使って、モノづくりを行う。



写真 4.4. 機械工学体験ラボ「The Tech Studio」

テーマは6ヵ月ごとに切り替わる。筆者が訪問した際のテーマは「FROM HERE TO THERE」で、そのミッションは向こう岸にボールを運べ、というものであった。単純にボールを運ぶといっても、橋を作って渡すのか、それともクレーンを作って吊り上げるのか、弓矢を作って飛ばすのかなど、様々な方法がある。机に置かれたカードには、そのうち1つの方法が指定されており、参加者はその方法を実現させるためのモノづくりを行う。そして最後に作ったモノを使ってボールを運べるか挑戦して確かめる。



写真 4.5. ①モノづくりのための部品や工具類
②テーマ「FROM HERE TO THERE」
③机に置かれたカード「SLIDE IT!」



写真 4.6. ロボット工学体験ラボ「Social Robots」

4-3. 特徴的な展示手法

最先端の技術というのは日進月歩であり、関連する展示は短期間で更新することも求められる。そのためテクノロジーでは、ハイテク企業と連携し、定期的に展示の更新を行っている。その際、まずは企業の開発部と展示の試作品を制作し、実験的に試作品を公開しながらブラッシュアップを繰り返す「プロトタイプ」という特徴的な展示手法を採用している。展示場2階

に「プロトタイプ」コーナーがあり、来館者の反応や意見を集め、企業へのフィードバックを行っている。

この手法では、試作の段階でより多くの意見を取り入れることができ、最終的には最も効率よく来館者が求める展示へ進化させることができる。また、企業としても、普段のマーケティングとは全く異なる層からの貴重な意見を得られる、という利点がある。

4-4. 教育プログラム

テックイノベーションでは、おもに小中学生向けの教育プログラムが充実している。たとえば、毎月 1～3 回不定期ではあるが、土曜日に科学技術に関するワークショップが開催されている。最近では 3D プリンタでのモノづくりや、はんだ付け体験などが行われている。小中学生向けの科学実験教室は月平均 120 教室も開催されており、昨年は3万人以上の生徒が参加したという。

また「Tech Challenge」は小中学生が複数のグループに分かれ、設計・製作・試験など一通りの開発プロセスを体験する特別プログラムである。参加者はグループのメンバーと協力しながら数ヶ月間にわたって開発を行い、最後にその成果を発表する。他にも、毎年 6～8 月に集中講座として行われる Summer Camp や、科学技術に興味を持つ女の子向けに年 1 回開催される特別イベント「Girls Day」などがある。

その他、次世代の育成には欠かせない学校の先生向けの教員養成プログラムも充実している。プログラミング学習の仕方や工作の進め方など、科学教育に関する手法について、教職員が学ぶ機会を多く提供している。

5. ローレンス・ホール・オブ・サイエンス

ローレンス・ホール・オブ・サイエンスはカリフォルニア大学バークレー校内にあり、サイクロトンの発明でノーベル物理学賞を受賞されたアメリカの物理学者ローレンス氏を記念して建てられた科学館である。



写真 5_1. ローレンス・ホール・オブ・サイエンス 外観

5-1. 展示場

1 階が展示場になっており、プラネタリウムが併設されている。地下 1 階には 3D シアターや教室、カフェなどがある。

展示場は作ったり試したりしながら原理を学ぶ体験展示が多かった。「Design Quest」エリアでは、一つ一つの展示にレベル 1～3 のミッションカードが置かれている。来館者はカードに書かれたクイズを、作ったり試したり試行錯誤を繰り返して原理を学んでいくことができる。例えば「Wind Works」展示では、いろんな形状の羽が用意されており、どの羽が一番早く回るのか？どの向きに取り付ければより早く回るのか？という試行錯誤を繰り返し、結果と考察を導き出すという体験展示である。



写真 5_2. 「Wind Works」展示

- ①ミッションカード ②どの羽が一番回転するのか？
③羽をつけてみる ④スタートボタンを押して実験！

5-2. プラネタリウム

展示場の一角に収容人数 30 名ほどの小さなプラネタリウムがあり、スタッフが今夜の星空やトピックスを生解説している。



写真 5_3. プラネタリウムホール(写真奥)

プラネタリウム終了後にお話を伺ったところ、カリフォルニア大学の生徒さんがボランティアスタッフとして解説されているとのこと。今回解説されていた方は、大学で超新星爆発の研究をしている学生さんであった。

星空解説では、参加者に「今夜の星空」シートを配布し、好きな星座を探してもらったり、ポインタを渡して指し示してもらったりしていた。他にワークシートも配布して、イオ・エウロパ・ガニメデ・カリストの中で好きな衛星を1つ、1日毎の位置をプロットさせ、衛星がどのような動きをしているのかを考えてもらっていた。解説者との距離がとても近く、参加者からは多くの質問が出ていた。全天周映像のような迫力のある映像などはないものの、とても分かりやすい説明と軽妙な話術で、実際の空で星が見たくなるような投影であった。

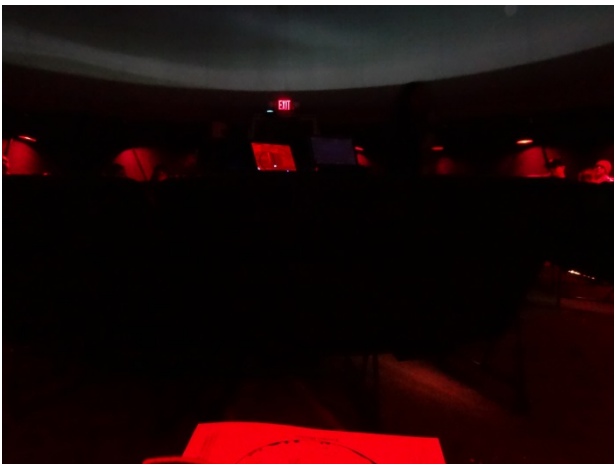


写真 5_4. プラネタリウムホール内のような様子

6. カリフォルニア科学アカデミー

サンフランシスコのゴールデンゲートパーク内にある世界最大級の自然史博物館である。1853 年にアメリカ西部初の科学機関として創立し、1906 年に現在の場所に移転した。2008 年には約 3 年もかけて大規模な改装が行われ、リニューアルオープンした。

外観写真と概要を以下に記す。



写真 6_1. カリフォルニア科学アカデミー 外観

表 6_1. カリフォルニア科学アカデミー 概要

設立年	1853 年
運営元	水族館：サンフランシスコ市 その他：非営利団体組織
対応言語	英語、スペイン語、中国語
年間入館者数	約 120 万人

館内には、水族館、植物園、プラネタリウムホール、その他展示がある。水族館のみサンフランシスコ市立だが、その他は財団法人(アカデミー)が運営をしているとのこと。2008 年の大規模改装により、館内は全面ガラス張りのデザインとなり、屋上からは太陽光や自然の風を取り入れる窓を設置するなど、環境に優しい施設に生まれ変わり、リニューアルオープン後の年間入館者数は改装前の約2倍にもなっているという。



写真 6_2. 正面入口(全面ガラス張りのデザイン)

6-1. プラネタリウム

この博物館のプラネタリウムは、モリソン式デジタルプラネタリウムを採用しており、おもに全天周映像を上映している。地下は水族館になっており、プラネタリウムホールのまわりは、上から水族館の水槽が眺められるようになっている。



写真 6_3. プラネタリウム

プラネタリウム専任スタッフが6名ほど在籍し、番組制作や解説、機械操作などをすべて自館で行っているとのこと。筆者が訪れた際には、2種類の映像番組を上映しており、入館料のみでいずれも観覧することができる。ただし、館内では事前に各回の整理券が配布されており、観覧希望者は番組の整理券を予め受け取る必要がある。



写真 6.4. プラネタリウムの整理券配布エリア

プラネタリウムホールへ入場する際、ホール外周が入場ゲートへの専用ルートとなっていた。ホールへの入場時に行列ができたとしても、他エリアへ影響を及ぼさないようにする見事な設計工夫であると感じた。

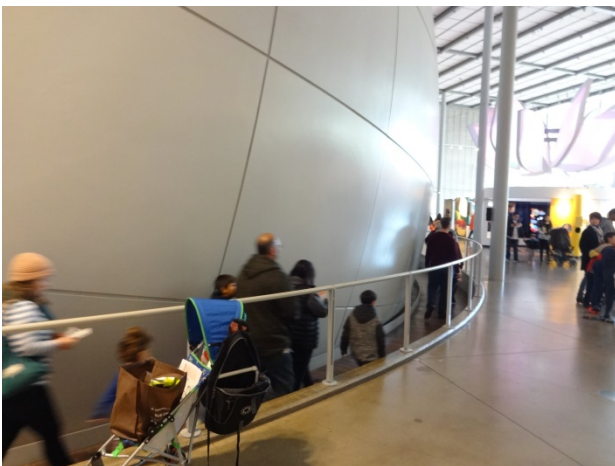


写真 6.5. プラネタリウムホールへの入場

ホール内は約 300 座席あり、当館と同じくらいの広さであった。投影開始時には、スタッフがホールの前で挨拶をしながら、手持ちのリモコンで映像や LED 操作をしていた。注意事項やお願いなどを説明しながら、うしろの投影台に移動し、映像番組を開始する。

星空解説はないものの、映像番組の途中でスタッフによる映像を補足する解説が 10 分程度入る。筆者が見学した際には、番組開始直後に映像の位置ずれがあり、何度かやり直すというアクシデントがあった。しか

し、そうした中でも解説者は慌てることなく、巧みな語り口で観客を和ませており、拍手まで飛び出すほどドーム内は楽しい雰囲気にも包まれた。

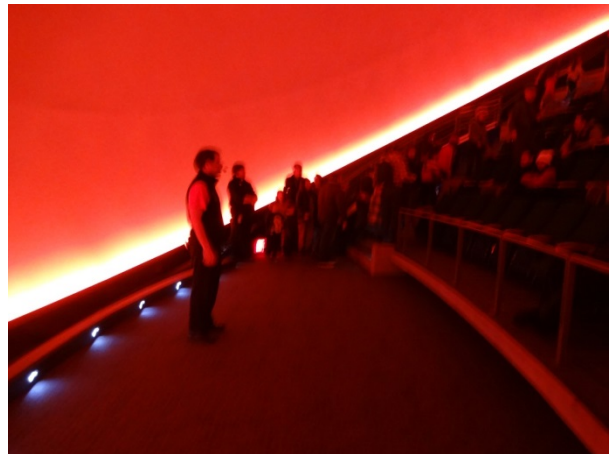


写真 6.6. 番組開始時のあいさつ



写真 6.7. ホール内はほぼ満席で人気うかがえる

6-2. その他展示

プラネタリウムの横には、同じく球体の形をした植物園がある。植物園は 1 階から4階まであり、外周にスロープが設置されている。



写真 6.8. 植物園(左)と地震に関する展示(右)

来館者はスロープを登りながら植物や蝶、鳥などを見て熱帯雨林の世界に浸ることができる。こちらも人気のようで、つねに入場者の行列ができていた。

また、植物園のとなりに地震に関する展示があり、1906 年サンフランシスコで起きた地震を体験するコーナーや、防災グッズの展示、地震が起こった時にどうすべきか？という対処法を学ぶ体験展示などがあった。



写真 6.9. 企画展「Color of Life」エリア

その他、鉱物や宝石の展示、さまざまな色に関する企画展「Color of Life」、さらには標本や書籍などを観察したり閲覧できるナチュラリストセンターなど、研究がどのようなものかを身近に感じられるような展示もあった。

7. エクスプロラトリウム

1969 年に物理学者フランク・オッペンハイマー氏によって設立された博物館で、設立当初より科学と芸術の共存をビジョンに掲げている。

エクスプロラトリウムの外観と概要を以下に記す。



写真 7.1. エクスプロラトリウム 外観

表 7.1. エクスプロラトリウム 概要

設立年	1969 年
運営元	非営利団体組織
展示エリア	75,000sq.ft.(約 7,000 ㎡)
対応言語	英語、スペイン語、中国語
展示点数	約 650 点
年間入館者数	約 85 万人
スタッフ体制	常勤フルタイム:260 名 常勤パートタイム:90 名 ボランティアスタッフ:280 名

今回は公式訪問ということで、プログラムディレクターのクレアさんにいろいろなお話を伺った。



写真 7.2. 公式訪問のようす
(中央:クレアさん)

7-1. 博物館の使命

この博物館では、「革新的な展示や教育プログラムやツールを通して人々に世界に対する好奇心を養うための学習文化を創造すること」を使命に掲げ、誰もが楽しむことのできるミュージアムを目指し、教育者や物理学者、アーティスト(芸術家)がともに作り上げている。

7-2. 展示場

展示場には、体験型を中心に約 650 点もの展示がある。当館と比べ、展示場の広さは約2倍、展示物は約3倍にも及ぶ。今回公式訪問した博物館の中では唯一映像作品を観覧するシアター(プラネタリウムホール)のない施設であった。

館内は大きく6つの展示エリアに分かれており、光や音に関する体験展示がバリエーション豊かに並べられた「Seeing & Listening」エリアや、DNA や細胞から生物の生態系を探る「Living Systems」エリア、自分の手で動かしたり工作したりしながら基本的な物理法則を学んでいく「Tinkering」エリアなどがある。

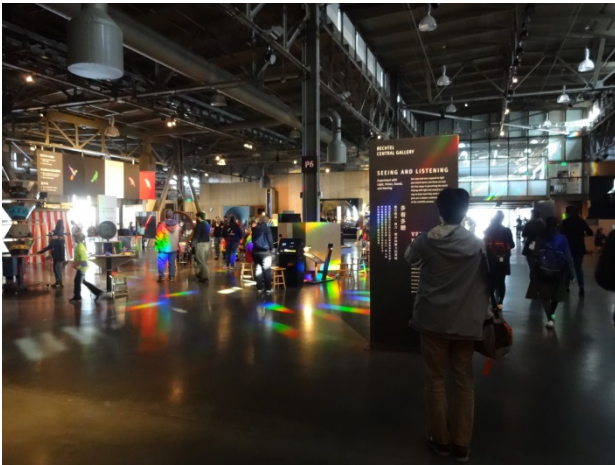


写真 7_3. 展示場「Seeing & Listening」エリア

また展示場には、展示開発工場があり、大がかりな展示制作が可能となっている。ここではおもに展示の修理や新展示の開発などが行われている。

展示の修理に関しては、データベースで不具合管理を行っており、展示が現在どのような状態なのかを一覧で見られるように管理されている。また、新展示の開発では、スタッフがアイデアを出し合い、試作品を制作する。その後ブラッシュアップを続け、より良い展示へと仕上げていく。スタッフの方にお聞きしたところ、10 年も 1 つの展示の改良を続けていることもあるという。また、この展示開発工場は、展示として来館者が見学できるように設計されている。



写真 7_4. 展示開発工場

7-3. 科学と芸術の共存

エキスポラトリウムの最大の特徴は、豊富なハンズ・オン展示である。それは、設立当初から掲げられた「科学と芸術の共存」に由来するものであることが、今回の視察で理解できたように思う。多くの展示物が、単に「理解しやすい」「分かりやすい」だけではなく、いかに「おもしろい」や「なぜなんだろう?」「ふしぎだな」といった来館者の感性を引き出せるか、という工夫が凝らさ

れていた。科学も人間の文化の 1 つであり、人間の持つ感性(視覚や触覚、聴覚など)を以て、より深く科学を感じ、楽しむことが可能となる。エキスポラトリウムでは、芸術的要素を取り入れ、来館者の感性を刺激する手法で科学を楽しむ文化の振興を目指しているのだと感じた。例えば、ウォータークーラーがトイレになっている展示があったりと、“遊び”の要素も取り入れることで、来館者はさまざまな展示に興味を持ち、自発的に理解しようとするのではないかと感じた。



写真 7_5. ウォータークーラーの見た目がトイレ?

7-4. 書籍

エキスポラトリウムでは、展示のデザインや設計手法などをまとめた「クックブック(Cookbook)」を発行している。また、さまざまな実験や工作などを楽しみながら学ぶことができる「スナックブック(Snackbook)」も発行している。こうした書籍にも“遊び”の要素がふんだんに取り入れられており、一般の人々だけでなく多くの科学系博物館のガイドブックとして活用されている。

8. 研修を終えて

今回は、公式訪問4施設、そして自主的に訪問した数ヶ所の博物館、また今回は紹介しなかったが、全員で訪問したモントレーベイ水族館や Intel ミュージアムなど、多くの博物館を視察することができた。どの館もそれぞれ特徴が違い印象的であったが、いくつかの共通項も見られた。ここにまとめとして記載する。

①入退場ゲート

入退場ゲートは一般／会員／団体専用などに分かれている館が多かった。これは、博物館の敷地面積がそもそも広いから、という理由もあると考える。

②来館者の反応

来館者が能動的に科学を学ぼう、知ろうとしている姿勢が強いように感じた。「科学を楽しむ文化」というのが

浸透している地域だったように思う。入館料は日本に比べて随分高い(1,500 円～2,000 円ほど)。にも関わらず、平日でも来館者は多かった。

③市民からの寄付

日本に比べ、アメリカの博物館では個人や団体からの寄付が多く、重要な予算源となっている。館内には寄付を募る展示があり、多くの賛同を得ている様子が見えた。

④長期的な PDCA サイクル

館内の展示や普及活動について、柔軟で長期的な視野での PDCA サイクルが行われていると感じた。例えばテクノロジーでは、プロトタイプを展示し、来館者の反応をフィードバックしながらブラッシュアップをしていたり、エキスポラトリウムでは 10 年も同じ展示に試行錯誤を続けていた。来館者の声に耳を傾け、まさに来館者とともに博物館をつくりあげている姿勢であると感じた。

謝辞

今回の視察研修では、水族館や科学館、展示制作に関わる企業の方などと一緒に海外の博物館を訪れる機会を得ることができました。お互いに専門も立場も異なる関係者同士の情報・意見交換は、筆者にとって初めての経験であり、参考になるものでした。全く違った視点からの意見や考察を聞くことができ、個人で視察しただけでは気付かなかった点も多かったように思います。

11 日間にわたって、ともに視察研修に訪れた 11 名の視察団員のみなさん、そして、今回の視察に同行いただいた添乗員の鈴木さん、ならびに関係者のみなさまに、改めて深く御礼申し上げます。